

「ムスリム・シオニスト」が投げかけるもの ーパレスチナ問題の現状認識と二項対立の罫ー

ハディ ハーニ

要旨

パレスチナ問題に関してとりうる多様な立場の中でも、とりわけ特徴的なものが、近年登場している「ムスリム・シオニスト」という立場である。既存の紛争理解では、その主要当事者の民族的・宗教的帰属を基準に、「パレスチナ・アラブ・ムスリム」的立場と、「イスラエル・ユダヤ」的立場という対立軸を描くことが一般的であったが、この把握の方法においてムスリム・シオニストは両立場にまたがる、すなわち自己矛盾を孕む立場と考えられるためである。

現状においてムスリム・シオニストは組織的な運動に発展しておらず、ひとつの思想として体系化されたものとは言えない。これを反映し、学術的議論の対象とはされてこなかった。ただし、パレスチナ問題の解決が行き詰まりに陥り、問題解決のための何らかのオルタナティブが求められる現在、ムスリム・シオニストの視点は既存の紛争理解の方法を相対化し得るものとして注目に値する。本研究では、SNS上に投稿された主要なムスリム・シオニストによるディスコースを分析対象として、批判的ディスコース分析の立場から検討を加えた。

ムスリムとしてシオニズムを支持する彼らのディスコースにおいては、第一に重層的な二項対立の構図が存在していることが特徴的である。具体的には「民主主義的で寛容なイスラエルやシオニズム」と「不寛容で暴力的な主流なアラブ・イスラーム世界」という二項対立、および「穏健で非暴力的な真のイスラーム」と「過激で暴力的な偽りのイスラーム」という二項対立である。加えて特徴的な点は、内集団において何らかの問題点を自覚することが、外集団の支持に転化するという二者択一的かつ短絡的な論理が存在する点である。そしてそのような論理の正当化は、紛争の歴史や、双方の紛争当事者に対する抑圧や暴力の構造についての客観的な評価ではなく、個人的かつ限定的な経験の中で形作られた確信に基づいている。結果的に、彼らの論理は主にパレスチナ側に対する抑圧に加担していると捉えられる。

このような二項対立・二者択一的論理は、ムスリム・シオニストの事例のみならず、あらゆる社会的・政治的問題に向き合う際の姿勢について示唆を与えている。結果的に本稿では、内集団と外集団双方に対する批判的態度を持つことによってしか、持続可能な問題解決は望めないことを指摘した。

キーワード

パレスチナ問題、ムスリム・シオニスト、批判的ディスコース分析、表象、抑圧

What "Muslim Zionists" Cast On: A Trap of Dichotomy and the Ways to Recognize the Question of Palestine

Hani Abdelhadi

Abstract:

Among the various positions that can be taken on the Question of Palestine, the position of "Muslim Zionists" that has emerged in recent years is particularly characteristic. According to the existing understanding of conflict, it was common to depict the major axis of confrontation between the "Palestinian Arab Muslim" and the "Israeli Jewish" positions based on the ethnic and religious affiliation of the main parties concerned. Therefore, Muslim Zionists are considered to belong to both positions, that is, a position with self-contradiction.

At present, Muslim Zionist has not developed into an organized movement, and it cannot be said that it has been systematized as a single thought. Reflecting on this, it has not been subject to academic discussion. However, at a time when the solution of the Question of Palestine has reached an impasse and certain alternatives are needed to solve, the view of Muslim Zionists is worthy of attention as it can relativize existing methods of understanding the conflict. In this study, discourses by major Muslim Zionists posted on SNS were analyzed from the viewpoint of critical discourse studies.

In their discourse, which supports Zionism as Muslims, the first characteristic is the existence of a multilayered dichotomy. Specifically, there is a dichotomy between "democratic and tolerant Israel/Zionism" and "intolerant and violent Arab/Islamic world," and a dichotomy between "moderate and nonviolent true Islam" and "radical and violent false Islam." In addition, a characteristic point is that there is an alternative and short-circuiting logic in which the awareness of some problem in the in-group translates into support for the out-group. And the justification for such logic is based not on an objective assessment of the history of the conflict or the structure of oppression or violence against both parties to the conflict, but a conviction shaped by personal and limited experience. As a result, their logic is seen as largely complicit in the oppression of the Palestinian side.

This dichotomous and "either-or" logic suggests implications not only to the case of Muslim Zionists but also to our attitudes in dealing with all social and political issues. As a result, this paper points out that sustainable problem solving can only be achieved by taking a critical attitude toward both in- and out-groups.

Keywords:

The Question of Palestine, Muslim Zionist, Critical Discourse Studies, Representation, Oppression

1. はじめに

1-1. パレスチナ問題の一般的理解と表象の問題

本稿は、ムスリム・シオニストのディスコース¹に注目しながら、パレスチナ問題を単純な二項対立的な図式の中で捉えることによって陥る、特定の権力・抑圧の維持について考察することを目的としている。その前提として、オスロ・プロセスが事実上の破綻を迎えた 2000 年年初頭以降、パレスチナ問題における和平の試みが慢性的な停滞に陥っているという現状がある。

もう一つの背景として、パレスチナ問題についての捉え方の多様化という問題がある。例としては、この問題を単にイスラエルとパレスチナの間の領土や市民権、難民の帰還権や補償をめぐるドライな紛争として捉えるのみならず、イスラエルが体现する人種主義や植民地主義、帝国主義といったイデオロギーからの解放・決別・勝利を含意させて捉える認識方法などがある²。こうした表象は西洋・中東においても³、また日本においても広く受容・継承されており⁴、特にイスラエルやシオニズムに批判的な議論において広くみられる。一方イスラエルに肯定的な論者はこの問題を「パレスチナ問題」というより「ユダヤ人問題」として表象することも少なくない。この場合はイスラエルおよびユダヤ人の被害者性や、それを否定する反ユダヤ主義が特に強調され、パレスチナ側に対する抑圧が軽視あるいは隠蔽される場合がある⁵。

他にも、パレスチナ問題を神学などの宗教的な価値体系の枠内で表象する議論も珍しくない。宗教シオニズムの視点では、神学的にユダヤ人国家の必要性・正統性が説かれる⁶。イスラーム世界では、パレスチナ問題がジハード論の枠組みにおいて説明されることも少なくない⁷。さらには、米キリスト教福音主義者の一部における「キリスト教シオニズム」の動きがあることも広く知られている。これらの宗教的論理を通じた表象においては、それぞれの救済の成就など、来世的な価値の実現のためにはパレスチナ問題はどうかあるべきか解釈するのであって、必ずしも、民族自決や国民国家の樹立、人権思想や平等主義といった世俗的な価値観に基づいて展開されるのではない。

1-2. 大きな対立軸とその外側

このように、パレスチナ問題の表象の方法には多様性があり、上述したものもそのすべてを紹介できたわけではない。しかしながら、これらの表象の種類については、大方2通りに分類することが出来る。すなわち、イスラエルに批判的かつパレスチナの側に肯定的な表象の仕方と、イスラエルに肯定的かつそれに対抗する主体、特にパレスチナ側に対する否定的な表象の仕方が存在する。また前節

において確認したように、この際基準となる価値には、世俗的なものもあれば、宗教的なものもある。

パレスチナ問題に関与する主体は、あるときは意識的に、またあるときには無意識的に、諸価値の間に優先順位を設けたり、ある特定の側面のみ注目したり、別の側面については無視したりする⁸。そうして選択された価値の実現という観点に照らして、問題に対する立場のとり方、あるいは表象の仕方が決定される。これはパレスチナ問題に限らず、あらゆる現象に向き合う際にも共通する。そのいずれの主体も、暫定的にであれ、確信としてであれ、自身の認識こそが真実性の高いものであることを主張する。異なる立場が存在すること自体を承認することはあっても、受容することは稀であり、むしろ互いに攻撃しあうことも珍しくない。

認識が対立するとき、それが単純に事実関係に対する一方の無知が原因であった場合などはさておき、多くの場合、こうした論争には簡単には決着がつかない。なぜならそれは、いずれの価値に優先順位を置くかという、各主体の信条・信仰と密接にかかわっているためであり、単に実証的事実を基準とした論争ではないためである。この場合、最終的な決着がつくためには、そうした対立する一連の価値の体系⁹が有する（政治・経済・軍事・社会それぞれの側面における）総合的なリソースの均衡が崩れ、一方が他方を圧倒していることが客観的に明らかになるか、それが真実ではなくとも「そうであると信じ込まされる」必要がある。

パレスチナ問題の文脈では、従来、上述の2分類における前者、すなわちイスラエルに批判的かつパレスチナの側に肯定的な立場をとる主体の中には、宗教を問わずパレスチナ人やアラブ人、また非アラブのムスリムなどが主に含まれていたことは言うまでもない。さらには、そこには世俗的価値のレベルでパレスチナの大義に共感する多くの異民族、異教徒も含まれる。そして逆の立場についても同じことが言え、ユダヤ教徒やイスラエル人、または一部のキリスト教徒といったものが主に含まれる。このように大まかな対立軸が描けることの背景には、当然、民族的・宗教的な同胞意識や、政治的・経済的な利害の一致といった要因が位置づけられる。

1-3. 研究対象：現代ムスリム・シオニズム

しかし実際には、このような従来の対立軸の中ではとらえきれない、あるいは取りこぼされてしまった立場というものが無数に存在していることにも注意しなければならない。その象徴的な例が、本稿で扱うムスリム・シオニストという存在である。

よく知られているようにシオニズムにはいくつかの潮流がある¹⁰が、現代において主流といえるシオニズムとは、歴史的パレスチナにおけるユダヤ人国家の樹立・維持を目指す、ナショナリスティックな運動であると緩やかに理解できる。同時に重要なのは、現実問題として、現代の主流派シオニズムは、特にイスラエルの存在を否定する主体に対する何らかの形態での抑圧を一定程度許容しているという点であり、本稿ではこれも現代シオニズムの性質の中に含めて理解することとする。対してムスリムとは宗派等を問わずイスラームを信仰する者のことを指す。当人が真にムスリムであるかどうかを判断することは、究極的には唯一神アッラー以外には誰にもできないが、少なくともその当人が自身をムスリムであると自認する限りにおいては、それを否定することは他人には不可能であり、その意味において当人をムスリムと認めることにする。

したがって以上の理解に沿う限りにおいては、ムスリムでありながら、ユダヤ人の民族国家の樹立を目指すシオニズムを支持するということは、論理的には全く矛盾しない。しかし現代においては、パレスチナ人の圧倒的多数がムスリムであることから、アラブ世界・非アラブ世界を問わず、ムスリムであることがパレスチナ人ムスリム（あるいはパレスチナ人一般）への連帯を示すひとつの自然な契機となってきたことは明らかであり、ゆえにムスリムはパレスチナ人を抑圧するイデオロギーとしての現代シオニズムを当然支持しない、という理解が広く一般的なものとなっている。つまり、シオニズムとムスリムであることは、「通常は」矛盾する。しかし、ムスリム・シオニストらにとっては、それが可能となっている。本稿では、それはいかにして可能になっているのかという点に光を当てる。

なお前提として、本稿でムスリム・シオニスト（あるいはムスリム・シオニズム）というときには、基本的に現代のそれを意図している¹¹。これに対し、特に1948年以前の歴史的パレスチナ地域へのユダヤ人移民やユダヤ人共同体の存在に支持的な思想や運動が存在したことについては、コーヘンの議論¹²等が明らかにしているが、当時の社会的・政治的背景は現在と大きく異なるため、本稿が扱う「現代ムスリム・シオニズム」とは区別する。というのも、イスラエル建国以前のアラブ人社会の視点から見て、ユダヤ人移民が人道的・宗教的に保護・受容すべき対象と捉えられることは何ら不自然ではないためである¹³。そのような事例をもって、シオニズムを支持するアラブ的およびイスラーム的な思想や運動、すなわちムスリム・シオニズムが存在したとみなすことは誤りとは言えないが、これを旧ムスリム・シオニズムと便宜的に呼ぶとすれば、1948年以降は政治的にも軍事的にも強者としての地位を維持し、歴史的パレスチナのアラブ系住民に対し概して排他的かつ抑圧的に行動してきた国民国家としてのイスラエルの存在を

目の当たりにしてもなお、旧ムスリム・シオニズムの思考様式がそのまま現代に継承されていたとは考えにくい。本稿が扱う現代ムスリム・シオニズムとは、そのような抑圧的・排他的なユダヤ人国家のイデオロギーが主流化した現在のイスラエルの姿を、それでもなおムスリムの視点から支持する思想・運動なのである。

このような現代ムスリム・シオニズム、あるいは現代ムスリム・シオニストに関する学術的な研究は、英語・日本語を問わず管見の限りほぼ存在していない¹⁴。これはムスリム・シオニストの事例が稀であること、組織的な運動には発展していないことなどから、パレスチナ問題に関する政治学的・歴史学的な観点からの意義を見出しにくいことがひとつの原因と思われる。しかしながら、パレスチナ問題の表象の問題をテーマとするとき、そのような立場が示唆し得るインパクトを軽視すべきではないだろう。ムスリム・シオニズムを単なるシオニストのプロパガンダとして一蹴するのではなく、その存在を事実として受け止める必要がある。ある現象を異なる視点から捉えなおし、既存の認識の方法を絶えず批判・反省し、修正していくという視点は、パレスチナ問題の解決を志向するうえでも、またあらゆる社会的・政治的課題に取り組むうえでも重要である。

1-4. アプローチ：批判的ディスコース分析

以上を受け、本稿では批判的ディスコース分析（Critical Discourse Studies の頭文字を取り、以下 CDS と表記する）のアプローチから検討を行う。CDS とは既存のイデオロギーや認識の普遍性に疑問を投げかけ、批判・解体する研究アプローチとして発展してきたことから、本稿の問題意識に合致するといえる。

CDS の理論的側面について論じ、自身も実践者であるヴォダックは、CDS を「言語の中に現れた支配、差別、権力、そして管理という、目に見えるだけでなく、不透明の構造上の関係性を分析することに大きく関わる研究」と定義している¹⁵。また CDS の大家であるフェアクラフの議論をまとめれば、CDS とはテキストに対する質的な分析を通じて、ディスコースの中に存在するイデオロギーの性質を明らかにすることを目指す社会科学的なアプローチのひとつである¹⁶。そしてイデオロギーとは、「権力や支配や搾取の社会的関係の確立、維持、変化に関与するものとして表されうる世界の諸相を表象するものである。イデオロギーに関するこのような『批判的な』視点は、イデオロギーを権力の一様式としてみなすものであり、社会集団のなかでの権力や支配の関係に言及することなく、イデオロギーを諸集団の地位、態度、信念や考え方等とみなす、さまざまな『記述的な』観点とは対照をなす」¹⁷。CDS 研究者はこうした観点に立ち、特定の現象の記述を目指すのみならず、それが社会的抑圧や支配に関係するという意味において自

覚的に批判を行う。

CDSには複数の流派があり、統一的手法が確立されているわけではないが、本稿では主にフェアクラフの議論に倣って分析を行う。具体的なテキスト分析の際に注目すべき観点については、フェアクラフは12項目を挙げている¹⁸。ただし、フェアクラフ自身が指摘しているように、これは対象とするテキストによって必ずしもすべての観点から網羅的に分析を行うべき、とするものではなく、コンテキストおよびテキストの種類によっても変化する。本研究もまた、各テキストに対して、全ての観点に対する網羅的記述を行うものではなく、適宜組み合わせながら分析を行っていく。重要な分析概念については議論の中で注記する。

まとめれば、本稿ではCDSのアプローチを通じ、複数のケースを取り上げながらムスリム・シオニストのディスコースについて分析し、彼らのディスコースの中のイデオロギーの性質を明らかにする。そして、それがいかなる権力・支配といった社会的関係の確立や維持に関与しているのかを明らかにする。その結果から、彼らのような立場を従来の対立軸の中でいかに位置づけることができるのかを検討しつつ、パレスチナ問題の表象の問題について改めて検討したい。

2. ムスリム・シオニストのディスコース

2-1. サーラ・ズアビーの事例

はじめに取り上げるムスリム・シオニスト¹⁹の事例は、イスラエル北部の町ナザレ出身のイスラエル内パレスチナ人²⁰女性のサーラ・ズアビー(Sarah Zoabi)である。イスラエルではその特異な政治的見解により知られ、複数の講演等を通じて一定の社会的認知を獲得している。イスラエルの人気テレビ番組「マスター・シェフ」に出演し政治的立場について語ったり、クネセツ(イスラエル議会)での演説経験を持つなど、職業政治家および研究者や著述家ではないまでも、「話題の人物」として一定の社会的影響力を有する事例である。2016年8月にYouTubeに投稿されたヘブライ語による約6分間のモノローグ動画²¹では、その思想について語られている。動画タイトルは「サーラ・ズアビー：誇り高きムスリム・シオニスト」となっている。以下ではこの内容について検討する²²。

ズアビーは、「自分のことをアラブ人、ムスリム、イスラエル人、そして誇り高いシオニストと定義しています」と語り、「聖なるイスラエルの地にてユダヤ人が自らの国を持つ権利を、完全なる信頼をもって支持し、また信じます」とする、典型的な現代ムスリム・シオニストである。彼女を含むイスラエル在住のパレスチナ系住民については、例えばグロスマン²³やホホワイト²⁴等により詳しく紹介され

てきたが、イスラエル全人口のおよそ2割を占め、法的にはユダヤ人と同等の権利を有するものの、社会的・政治的には二級市民扱いを受けてきたとする議論がよく知られている。

しかし、ズアビー自身は、イスラエルにおける差別的構造についてはほとんど意識していないのか、そうしたことについては動画では触れていない。むしろ彼女によるシオニズム支持の根幹部分にあるのは、「イスラエルは他のアラブ諸国より民主的価値を重視しており、市民として充実した権利を享受できる」という点に集約されており、そのような差別は彼女にとってはほとんど存在しないかのように扱われている。動画では、「私は市民権を与えてくれた国に、その目を開いた瞬間から、忠誠を誓っています。私は全てを与えてくれた国に忠実なのです。また私は、温かさ、愛、支えを与えてくれる人たちに忠実です」と語り、加えて「イスラエルには、表現の自由、宗教の自由があります。人種、宗教、性別、肌の色に関係なく、真の民主主義と寛容があるのはイスラエルだけです」とも述べている。

しかし、彼女が強調する民主性や権利の享受といったものは、相対的な評価に基づくものであることは注目に値する。これは、パレスチナ自治区を含む周囲のアラブ諸国に一般的な権威主義的体制下では、イスラエル内で享受できる市民的権利と比較すれば自由度が圧倒的に低い、とする議論である。しかし先行研究が指摘してきたように、イスラエル内パレスチナ人は概して完全な市民的自由を享受できているわけではないことが知られているが、この点は不問となっている。これを裏付けるのは、彼女の個人的経験であると思われるが、動画ではこれについてより詳細な議論は展開されていない。

ズアビーは「私はすべてのイスラエル内のアラブ人に言いたい。今こそ目を覚ます時だ、と。私たちは天国にいる。他のアラブ諸国と比べると、私たちは天国にいるのです」とも言及している。「目を覚ます(wake up)」との表現には、当然、非ムスリム・シオニストが真実から目を背けているか無知である、という前提が含まれている。非ムスリム・シオニストの見解に対して一定の理解を示す余地はほぼ残されておらず、彼女の非対話的²⁵態度が示されているといえる。また「他のアラブ諸国と比べると(To compare us to other Arab countries)」という箇所は、動画の中では唯一、評価が相対的なものであることを明示している。しかし彼女はそのこと自体を実際にはほとんど意識しておらず、「よい・悪い」という簡略的な評価に転じている。付け加えれば、イスラエルを「天国」であるとまで定言的に表現することからも、その真理性を支持する強い心的態度(モダリティ)²⁶が示されているといえるだろう。

加えて特徴的な点は、アラブ人側を暴力性や過激性といった性質を通じて描写する点である。ズアビーは、イスラエルに対するテロ行為を指して「それはユダヤ国家を破滅・破壊しようとしています。ラディカルなイスラームは偽りの宗教です。彼らは私たちから宗教を盗んだのです。彼らが人々にしていることは洗脳です。イスラーム過激派は世界中に広がる癌なのです」と述べ、暴力に訴えるイスラーム過激派を糾弾する。またテロにおいては彼女のようなイスラエル内パレスチナ人市民も等しく暴力の対象となる可能性があることに言及しながら、イスラエルに対する攻撃的態度や思想を、自身に対する脅威としてみなしている。一方、「テロ」とは何か、イスラエルに対するそれがなぜ起こるのか、あるいは「テロリスト」とされる側が被っているテロ・抑圧・暴力といったものについては特に言及されない。また彼女にとっては自分の信じる「穏健なイスラーム」こそが「正しい」ものであり、「過激なイスラーム」を誤りであると断じ、ここにも二項対立の構図が描かれている。

結果的に、ズアビーの議論においては二重の二項対立が描かれている。一つ目は、民主的かつ人権を尊重するイスラエルと、非民主的で人権が尊重されないアラブという二項対立であり、二つ目は、「穏健で非暴力的な真のイスラーム」と、「過激で暴力的な偽りのイスラーム」という二項対立である。中立的立場から整理すれば、イスラエルとアラブ諸国のいずれにおいても概して民主性および人権への尊重には問題があるとされ、暴力についてはむしろ前者のほうがより大規模に行っているとの理解が可能で、あえて中立的に評価するならそこには程度の差があるのみだが、ズアビーはこの「程度の差」の問題を「よい・悪い」の二項対立に簡略化して捉えているといえる。またイスラーム認識については、穏健性および暴力性のみが評価の基準となっており、「穏健かつ寛容な」イスラームの諸側面のみを本質主義的に「真のイスラーム」とみなすならば、人間の内面的事項のみならず社会的・政治的規範をも提示するイスラームのある意味でリアスティックな側面（共同体の防衛を意図した武装ジハードなどはまさにここに含まれるだろう）は基本的に「偽り」のイスラームを代表するものと評価される。結果的に、ズアビーの認識の中には、アラブ諸国や過激なイスラームの現状に批判的であることは、すなわちイスラエルとシオニズムを支持することを意味する、という命題の前提²⁷が存在していると捉えることができる。また、ズアビーの言葉の中には「…かもしれない」「…だろう」などの婉曲的表現が基本的に一切用いられておらず（つまり「モダリティ化」されていない）、一貫して定言的であり、自身の議論がもつ真理性に対して強い自信を持っていることが看取できる。

このような簡略化を通じたシオニズム支持のディスコースからは、パレスチナ

人の被ってきた抑圧それ自体、またそれが発生した経緯に対する描写は捨象されており、結果的に（特に被占領地の）パレスチナ人に対する抑圧を助長する一方的な議論となっている。パレスチナ系ムスリムでありながらイスラエル市民として生活するズアビーにとって、自身の生活圏内における利害に照らせば、むしろこの抑圧の構造に加担することによってのみ、自身の生活の充実が保証されるというリアリスティックな問題として捉えられている可能性は高い。しかしこのとき同時に、イスラエルの存在によって生存を脅かされているパレスチナ人の境遇に対する想像力の欠如といった点も浮き彫りとなる。こうした客観的かつ包括的とはいえない個人的経験に基づく認識の方法が、このような簡略化された見解の醸成に結実していると考えられる。

2-2. ヌール・ダハリーの事例

次に、パキスタン系イギリス人男性のヌール・ダハリーの事例を取り上げる。彼はカウンター・テロリズムに関する著述者・研究者としてイギリスで活動しており、複数の著作がある。また「対テロ・イスラーム神学」(Islamic Theology of Counter Terrorism: ITCT)と名付けられたシンクタンクの創設者・理事長でもある。2017年11月には、イギリスを拠点とするユダヤ系メディア「J-TV」のYouTubeチャンネルにて、ダハリーによる約6分間のモノログ動画（英語）²⁸が公開されている。動画タイトルは「私はムスリム・シオニスト。その理由はこれだ」となっている。

ダハリーは「私はパキスタン系イギリス人で、ムスリム・シオニストです。そして私のアイデンティティに矛盾はありません」としている。また「シオニズムとは、単に古代の故国におけるユダヤ人の自決権を信じることを意味しています」と言及しており、古代よりユダヤ人には歴史的パレスチナにおいて自決権を行使する権利が存在するとの見解を示している。

ダハリーの動画ではまず、幼少期からの経験を振り返りながら、ムスリム・シオニストになるまでの経緯について語られる。「私は、イスラーム的アイデンティティの一部として、深く反イスラエ尔的になるよう育てられました」と言及し、通常イスラーム世界では、反イスラエ尔的であることはイスラーム的アイデンティティの一部であるととらえられている、との見解を示した。

しかし2014年のいわゆるガザ戦争を契機として、彼の意見は変化したという。ダハリーの見解では、ガザ戦争においてイスラエル軍は民間人の死傷を最小限にとどめようとしたのに対し、ガザのハマースはそれを最大化しようとしていたのであり、そこには「明確な倫理的差異があった」点を強調している。それを契機

に独自調査を行い、イスラエルに関する真実をいくつも発見し、結果的にムスリム・シオニストになったという。ダハリーは「ユダヤ人とイスラエル人が世界で最も平和を求める国の一つであるということに気づきました」とし、イスラエルは1948年以降一貫して防衛的であり、戦争を開始したのは常にアラブ側であり、イスラエルがアラブ・イスラーム世界に脅威を与えたことはなく、また和平に際しても譲歩を重ねてきたと主張する。ここには、イスラエル側が基本的な平和的かつ普遍的価値に沿って行動してきたのに対し、アラブ側はそれを否定し、暴力や差別に基づいてきた、という命題の前提が含まれている。無論、こうした解釈はよく知られた一方的に偏向したシオニスト史観といえ、学術的には少なからず論駁を受けてきたものである。ダハリーのこのような見解の醸成に際してはシオニスト側に不都合な多くの事実が捨象されているのだが、彼としてはそれこそが自分の目で確かめた真実であり、正しく、それ以外の説明こそ宗教的差別感情（反ユダヤ主義）を前提とする偏向・誤謬であるという確信がある。ほぼすべての言表がモダリティ化されておらず定言的であることも、自身の主張に対する自信の高さを示していると評価できる。

加えてダハリーの特徴的な点は、自身をサラフィー主義²⁹ムスリムであると捉えている点である。そのうえで、聖典クルアーン上の記述がシオニズムの基本的原則を支持しているとする解釈から、ムスリムがシオニストであることには何の矛盾もなく、むしろそれこそが唯一正しいムスリムの在り方であると述べられている。その際、具体的な根拠としてはクルアーン第5章21節³⁰および第17章104節³¹が引用され、シオニズムを否定することはクルアーンの権威を否定することであると断じた。これらの章句は預言者ムーサー（モーセ）の時代の「イスラエルの民」とアッラーとの契約について述べられるものであるが、まずこれを現代のイスラエル国家と同等のものとして捉えられるのかという点について、次いでその契約が、ムスリムの共同体に対する排他性や抑圧、暴力を前提とするものであっても支持し得るのか、といった論点がある。これらについては、法学上の合意事項が存在しないというより、議論するまでもなく容認できないとする見解がこれまで一般的であったといえる。ところが、ダハリーがサラフィー的とする独自解釈によれば、これらの章句は現代シオニズムへの支持を無条件で意味しているという。無論、異教徒に対するジハードの法規に関連する章句や、侵略行為に対する明示的な否定といったクルアーンの他の章句については特に言及されず、恣意的に限定された章句の引用によって成立する議論であるということも付け加えるべきであろう。いずれにせよ、ダハリーはこうした理解を前提に「和平プロセスへの関与を拒否するパレスチナ人は過激で狂信的だ(extremists and fanatics)」

と述べる。こうした定言的かつネガティブな言及からも、ダハリーが自身の主張の真理性に強い自信を持っていることがうかがえる。

結果的に、ダハリーによるディスコースにおいても、二重の二項対立の構図が描かれているとまとめることができる。一つ目は、世俗的かつ普遍的な価値に沿うイスラエルおよびシオニズムと、これを脅かし破壊しようとする非倫理的かつ暴力的なアラブという二項対立である。二つ目の二項対立は、シオニズムを支持するサラフィー的な真のイスラーム実践と、シオニズムを否定する暴力的で誤ったイスラーム実践という二項対立である。

ズアビーの事例と同様に、ダハリーの見解醸成においても、シオニズムを肯定する過程で多くの事実が捨象されており、シオニスト側の視点に偏った一方的な見方となっている点は否めない。客観的かつ包括的な議論の末にシオニズムを支持するに至ったと判断することは難しく、恣意的に選択された一部の事実をつなぎ合わせて彼の「真実」が形成されているとみなせる。またディスコースの心的態度に注目すれば、多くの言表が定言的であり、主張の真理性に対する自信は非常に強く、異なる見解に対する攻撃的態度が示されていることから、対話性も閉ざされているといえる。

またダハリーのディスコースの場合も、それがイスラエルによる抑圧や暴力といった側面を捨象している点で、パレスチナ側に対して行使される抑圧の構造を結果的に支持することになっている。ダハリーの議論はズアビーの場合と同じく暴力や抑圧の双方向性についての言及が抜け落ちており、そのことに対する何らかの譲歩的言及はなされていない³²。先の事例であるズアビーの場合、パレスチナ系ムスリムでありながらイスラエル市民として生活することに鑑みれば、生きやすさの獲得を目指して打算的にシオニズムを支持するという可能性も考慮し得るが、ロンドン在住のダハリーの場合、そのような制約は考慮しにくい。そのうえでこの見解が醸成されていることには、彼自身の主張、あるいはその根幹にあるイデオロギーへの確信が強く示されているといえる。

2-3. カースィム・ハフィーズの事例

最後に取り上げる事例は、パキスタン系イギリス人男性のカースィム・ハフィーズの事例である。ハフィーズは著述家および活動家として活動しつつ、ユダヤ・イスラエル系メディアによる複数のインタビュー動画や記事を通じて自身の立場について語り、また2013年にはイスラエル外務省主催の「反セム主義と闘うためのグローバル・フォーラム」(Global Forum for Combating Antisemitism: GFCA)における「アラブ・イスラーム世界における反セム主義に関する作業部会」にて発言

した経験³³や、国連人権理事会にてイスラエルを擁護する演説を実施した経験³⁴等を持つ。また 2014 年以降は米国最大の福音主義シオニスト・ロビー団体として知られる「イスラエルを支持するキリスト教徒連合」(Christians United for Israel: CUFI)にて従事し、イスラエルおよびシオニズムの支持に関して公的な場で積極的な発言を続けている³⁵。ここでは在米キリスト教保守派報道機関であるクリスチャン・ブロードキャスティング・ネットワーク(Christian Broadcasting Network: CBN)によるインタビュー動画³⁶の内容をもとに分析を行う。動画は「パキスタン系ムスリムはいかにしてシオニストになったのか」と題され、長さは 4 分弱で、ハフィーズの信条について端的にまとめられた内容となっている。

ハフィーズはイギリスで生まれ、パキスタン人である父親からの教育を通じて「非常に露骨で直接的なイスラエル憎悪と反セム主義」を育んできたとし、学生時代には大学で反イスラエル・ボイコットを呼びかけるリーフレットの配布やデモ行進への参加などを経験してきた。当時ハフィーズは「パレスチナを解放し、世界からイスラエルを除去するために死をもいとわない」と考えていたと述べ、パレスチナ問題については「パレスチナ国家(Palestinian state)にユダヤ人がヨーロッパからやって来て、土地を盗んだ」ものと認識していたという。

しかし、転機となったのは在米ユダヤ人弁護士・研究者であり親イスラエル活動家として知られるダーショウィッツによる著書『ケース・フォー・イスラエル』³⁷を読んだことであった。ハフィーズは当初、同書をシオニストのプロパガンダとみなし、論駁するために手に取ったが、読んでみると実際には論駁は困難であり、むしろそれまでの自身の理解の揺らぎを感じた。特に誤認であったと彼が感じたのは「パレスチナ国家は存在したことがなかったこと」であった。この経験から、結果的にイスラエルを実際に訪問してみることにしたという。

ハフィーズの転機となった『ケース・フォー・イスラエル』は、ダーショウィッツの他の著作³⁸と同じく学術界においても物議をかもした。特に在米ユダヤ系政治学者フィンケルスタインによる『イスラエル擁護論批判』³⁹はダーショウィッツのこれまでの議論を痛烈に批判し、多くの問題点を指摘している。ダーショウィッツとフィンケルスタインの論争は書面上のものを超え訴訟にも発展したが、論争の本質はむしろ先述したようなパースペクティブの差異に起因する表象の問題であり、単純な事実誤認等の指摘はその一部に過ぎない。そのため論争に明確な決着がついたとはみなせず、また究極的には決着をつけることは難しいと予想されるが、いずれにしてもハフィーズはダーショウィッツ側の議論に強く感化され、ダハリーの事例のように、真実を突き付けられた感覚を覚えたものと思われる。

またハフィーズが誤認だったとして振り返るかつてのパレスチナ国家の存在／非存在という論点については、具体的に何を指しているのか不明瞭ではあるものの、独立したパレスチナ人の国民国家は、確かにこれまで存在したことがない、という意味では正しい。しかしイスラエル建国の際の問題点は、独立したパレスチナ国家がそれ以前にそこにあったかどうか、あるいはそうしたものがイスラエル建国によって亡国となったかどうかという点ではなく、歴史的パレスチナに長く居住してきたパレスチナ系住民に対しては公平な形で自決権が認められなかったこと、さらに多くのパレスチナ人が強制的・暴力的に退去・難民化させられたうえでイスラエルが建国された点にある。従ってむしろハフィーズが誤認であったとして改めた当初の認識それ自体が、既に誤った問題設定に基づく不十分な認識であったと指摘できる。言い換えれば、パレスチナ問題についてそもそも不十分な、あるいは場合によっては誤った理解を持っていたにもかかわらず、それを否定された経験を通じ、否定する主体のディスコースを真理として受容するという短絡的メカニズムが浮き彫りになる。ハフィーズの場合、彼のかつての信条を否定した主体がたまたま親シオニズム的なダーショウィッツの議論であったことが影響し、ダーショウィッツ的な理解が真理として受け入れられているのである。

その後イスラエルを訪問したハフィーズは、イスラエル国内の民族的多様性に驚愕し、「アパルトヘイトや人種差別」はイスラエルには存在しないと確信し、むしろ「人種差別を見たいなら非アラブ人としてサウジアラビアに行ってみましょう」と冗談交じりに述べる。無論、先行研究が示すように、可視的・非可視的かどうかに関わらず現実に存在すると指摘されている構造的差別の実態を、英語話者の外国人旅行者であるハフィーズが明確に認識できないことに無理はないが、むしろダーショウィッツの議論に感化された経験から得られた認知のバイアスを前提とし、彼の予感は確信へと変化している。またこれらの言及には、ズアビーの議論と同様に、相対的評価が過度に簡略化されることで出来上がる「よい・悪い」の二項対立的理解が含まれる。すなわち結果的に、イスラエルよりもさらに悪い例があるから、という理由で、二者択一的にイスラエルの状況を容認・肯定することになっている。このようなサウジアラビアについての言及はいわゆる「Whataboutism」⁴⁰の例であり、正当かつ客観的な批判とは言えない。

続いてハフィーズは、アラブ・イスラーム世界で陰謀論が人気を博し、「ユダヤ人がイスラームを破壊して世界を征服しようとしているという（中略）こうした反イスラエル運動には強い人気があります」とし、過去の自分の認識と重ね合わせる。そして全ムスリムがイスラエルとユダヤ人に関する現実を受け入れるべきであるとした。ハフィーズは続けて、イスラーム世界に蔓延したイスラエルやシ

オニズムに関する「神話(myths)」を信じるのが本当に平和につながるのか、といった点を批判する。これらの指摘それ自体は可能と思われるが、これは「アラブ・イスラーム世界に対する批判」のディスコースであって、「イスラエル・シオニズム支持のディスコース」とは必ずしも一致しない。しかしハフィーズの場合、彼が持つ強い二項対立および二者択一的な論理を通じて、前者を主張することがすなわち後者を受容することにつながっている。このようなディスコースは、ズアビーやダハリーにも共通しており、実際のところ、ムスリム・シオニストのディスコースにおける最も特徴的な点であると考えられる。

そして無論、ハフィーズのようなムスリム・シオニストのディスコースもまた、イスラエル側の行使する構造的・実体的暴力については何ら自省的な観点を持ち合わせておらず、一方的にアラブ・イスラーム世界を批判する内容となっている。この点で、パレスチナ人に対してなされる抑圧の構造に加担しているといっても過言ではない。

3. まとめ

3-1. 結論：事例におけるディスコースの特徴

ここで、各事例について振り返りながら、ムスリム・シオニストのディスコースの全体的特徴についてまとめてみたい。

最初に取り上げたズアビーは、二重の二項対立の構図を内在化することで、結果的にシオニズムやイスラエルを支持するディスコースを形作っていた。これは、ダハリーのディスコースにおいても共通している点であった。とりわけ、民主主義的で寛容なイスラエルやシオニズムと、不寛容で暴力的なアラブ・イスラーム世界といった二項対立が際立っていた。ハフィーズの事例ではイスラーム世界が抱える宗教的問題点はそれほど強調されていなかったが、ズアビーとダハリーの議論においては、「穏健で非暴力的な真のイスラーム」と、「過激で暴力的な偽りのイスラーム」という二項対立が含まれている。ズアビーとは異なり、ダハリーは自身をサラフィーと位置付けているが、特定のイスラーム実践を「真・偽」という基準で分類する方法論において共通している。

いずれの事例についても、単なる親イスラエル・プロパガンダとみなしたり、既存の実証主義的な歴史学や政治学的成果に基づいて論駁を試みることは可能であり、すでにいくつかの論点については上述した通りである。しかしながら、本稿の目的はこの点にあるのではない。これも先述した通り、パレスチナ問題に関する論争の大部分は、実証的な事実の問題というよりも、それを捉えるパースペ

クティブと表象の差異という点に帰される。こうしたものは、いわば「どちらもそうと言えなくもない」という性質のものであって、総合的な完成度・説得性についての相対的評価は可能だが、客観的で明らかな正誤を決定することは困難である。

むしろ本稿が強調したいのは、取り上げたディスコースの事例においてなされている不用意かつ過度に簡略化された二項対立・二者択一的論法の危険性という点である。CDSの理論家・実践者であるヴァン・デイクによれば「根底にあるイデオロギーは、内集団についての肯定的な表象と、外集団の否定的な表象を二極化する。そのような二極化は、すべてのレベルの談話（ディスコース）に影響を与える」⁴¹のであり、すなわちテキストの中にみられる「二極化」の問題は特定のディスコースにおけるイデオロギー的性格を強める重要な側面であるとみなせる。

本稿が扱った事例は、ある特定の知識や認識を持つ主体が、それを否定する新たな知識・認識に直面した際になしうる対応の方法についての一般的示唆を提示している。これには次の二通りが想定できるだろう。その一つの方法は、既存の知識・認識を保持したまま、新しい知識・認識を「それ自体として」受容するというものであり、二つ目の方法は、既存の知識を否定・破棄し、新しい知識・認識をそれに代わるものとして受容するという方法である。前者は必ずしも二極化を前提としないが、後者においては二極化が容易に可能になる。各事例においては、決して十分とは言えない、あるいは包括的・多角的とは言えない経験、独自調査、学習を通じて、自身が保持していた既存の知識・認識に完全に取って代わる知識として、親シオニズム的な知識・認識が受容されていた。より簡素化すれば、彼らは「既存の認識Aに加え、認識Bを獲得する」経験を通じて、AもBも同時に受容することで弁証法的に認識を強化するのではなく、「Aを否定・破棄し、Bを真実とみなす」結果に至ったのである。

3-2. おわりに：二項対立の罫

アラブ・イスラーム世界、あるいはパレスチナ人社会をヴァン・デイクのいう「内集団」として捉えるなら、そこに蔓延する社会的問題の存在を指摘し、批判することは、論理的には必ずしも「外集団」たるイスラエルやシオニズムを支持することを意味しない。むしろ、内集団に存在する何らかの抑圧的構造や暴力といった問題を指摘し、批判し、解決を目指すことは言うまでもなく必要な態度であるが、これは外集団との関係性とは本来は切り離された、独立した問題である。しかし、二項対立・二者択一的認識方法においては、これが完全に連結した表裏一体のものとして認識されてしまう。これにより、特定の抑圧や暴力を批判する

ことによって、対極に位置する抑圧や暴力を支持したり、加担したりするという結果が生じているのである。

そして実のところ、この二項対立・二者択一的な認識方法の問題は、ムスリム・シオニストのディスコースにおいてのみ見られるものではない。このような立場を批判する可能性が高い、ムスリムによる反シオニズム的ディスコースにおいても、同じような認識の方法がみられると想定される。すなわち、外集団としてのシオニズムやイスラエルを批判・否定することによって、内集団であるアラブ・イスラーム世界が抱える問題に対する批判的視点を失ったり、覆い隠してしまったりするという状況を招く。具体的には、例えばイスラエルやシオニズムを否定したいあまり、反ユダヤ主義や陰謀論に対する批判的視点を失ったり、アラブ・イスラーム世界における問題点を無視・軽視したりするといったことが往々にして起こる。これは先述した「Whataboutism」の一形態ともみなせ、正当な批判的態度とは言い難い。またこのような認識方法が蔓延した社会においては、内集団を批判する内部者に対する抑圧が起こる可能性が高い。

そうしたレベルの認識同士が対立している限り、パレスチナ問題に関して第三者的視点から頻繁に発せられる「イスラエルもパレスチナも悪い」とするディスコースの正統性を結果的に助長し、問題解決が行き詰まりから脱却することは困難となる。従ってそこから脱却するためには、むしろ内集団に対する批判的視点が同時に必要となるのである。

翻って、本稿で扱ったムスリム・シオニストの事例からは、次の点も示唆されているといえるだろう。すなわち、パレスチナ問題の公正な解決を求める際には、まずこの問題の要素として、パレスチナ・アラブ人社会に対してなされる抑圧の構造と、イスラエル・ユダヤ人社会に対してなされる抑圧の構造が双方向的に存在するという事実を認識する必要がある。当然、双方の構造には、その規模や暴力性における不均衡が存在するとの指摘は可能であり、重要な観点ではあるが、そうした理解が一方の抑圧的構造を覆い隠すことに利用されてしまう場合、別の抑圧の構造に加担してしまっているという意味において、これは批判されなければならない。そして究極的には、双方の抑圧的構造が解消されない限り、公正かつ持続可能な形での問題解決は見込めないと考えられる。逆説的とも思われるが、外集団による特定の抑圧的権力に抵抗するためには、内集団に対する自省的態度を忘れるべきではないといえるだろう。

注

- 1 フーコーによれば、ディスコースとは「自らが語る対象を体系的に構築する実践」である。またフェアクロー（フェアクラフ）によれば、批判的ディスコース分析においてディスコースの語は「社会構造により決定される社会的実践としての言語」と定義することができる。Michel Foucault, *The Archaeology of Knowledge*. (Pantheon Books, 1972) p. 49. ミシェル・フーコー『知の考古学』河出書房新社、2012年。ノーマン・フェアクロー『言語とパワー』貫井孝典&吉村昭市&脇田博文&水野真木子訳、大阪教育図書、2008年、19頁。
- 2 ハディによれば、これはPLOやファタハ等、1950年代以降の主流パレスチナ系組織のみならず、1920年代からすでにパレスチナのナショナリストらによってすでになされていた表象の仕方であった。ハディハーニ『パレスチナ問題における「解決」のディスコース分析—檻としてのナショナリズムに関する批判的検討—』慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士論文、2021年、75-109頁。ハディハーニ「初期パレスチナ指導層における「民族自決」概念の内在化（1918-1922）：批判的言説研究の視点から」『日本中東学会年報』No.36-2、日本中東学会、2020年、29-61頁。
- 3 エドワード・W・サイド『収奪のポリティックス：アラブ・パレスチナ論集成 1969-1994』川田潤&斉藤一訳、NTT出版、2008年、482頁。Tony Judt, "Israel: The Alternative," *The New York Review of Books*, October 23, 2003 (2021年7月16日アクセス) . <http://www.nybooks.com/articles/2003/10/23/israel-the-alternative/>
- 4 板垣雄三「パレスチナ問題は国家の枠組みを突き抜ける」ミーダーン＜パレスチナ・対話のための広場＞編『＜鏡＞としてのパレスチナ—ナクバから同時代を問う』現代企画室、2010年、262頁。臼杵陽「解題」ダン・コンシャール&ダウド・アラミー著、臼杵陽監訳『双方の視点から描く パレスチナ／イスラエル紛争史』岩波書店、2011年、268頁。
- 5 サラ・ロイ『ホロコーストからガザへ パレスチナの政治経済学』岡真理&小田切拓&早尾貴紀編訳、青土社、2009年。
- 6 立山良司「シオニズム」立山良司編『イスラエルを知るための60章』明石書店、2012年、32-36頁。ただし、ユダヤ教超正統派（ハレディー）と呼ばれる集団の中でもとりわけ保守的なネットゥレイ・カルタと呼ばれるグループなどのように、神学的見解の差異から宗教シオニズムおよびイスラエルの存在そのものを否定し、それゆえにパレスチナ人との共闘と占領の終結を志向する例もある。
- 7 ハディハーニ「イスラーム法からみるパレスチナ問題—二国家案・一国家案との比較検討と実現可能性に関する考察—」『イスラーム世界』第93号、日本イスラーム協会、2020年、27-60頁。
- 8 問題に含まれる特定の側面を無意識的に無視している状態とは、すなわちパレスチナ問題の枠組みの中で起こる何らかの社会的・政治的・経済的・宗教的事象に無知であることを指す。無知だった主体が「知る」ことによって、問題にかかわる際の立場を変えることも頻繁に起こる。
- 9 ここでは例えば、イスラエル擁護論やパレスチナ擁護論、といったもの。
- 10 赤尾光春&早尾貴紀「シオニズムを解剖する」赤尾光春&早尾貴紀編、臼杵陽監修『シオニズムの解剖 現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』人文書院、2011年、19頁。立山良司「シオニズム」32-36頁。
- 11 本稿で言う「現代」は主に2000年以降の状況を指して用いている。
- 12 Hillel Cohen, *Army of Shadows: Palestinian Collaboration With Zionism, 1917-1948*. Haim Watzman Translated. (Dorset, Vt: University of California Press, 2008).

- 13 無論、ユダヤ人移民を受容すべきとする観点に対して、移民が増加し続けることによってユダヤ人・アラブ人両社会の摩擦が拡大しつつあったことを危惧し、移民の増加に否定的な視点がむしろ主流であったことは言うまでもない。
- 14 メディアやブログ記事等において紹介される事例は複数存在する。David Margolis, “The Muslim Zionist,” *Jewish Journal*, February 2, 2001 (2021年7月16日アクセス) . <https://jewishjournal.com/news/worldwide/3943/> Sven Behrisch, “The Zionist Imam,” *The Jerusalem Post*, July 19, 2010 (2021年7月16日アクセス) . <https://www.jpost.com/Christian-In-Israel/Blogs/The-Zionist-Imam>
- 15 ルート・ヴォダック「批判的談話分析とは何か？—CDAの歴史、重要概念と展望」ルート・ヴォダック&ミヒャエル・マイヤー編『批判的談話分析入門：クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法』野呂香代子監訳、三元社、2010年、11頁。
- 16 ノーマン・フェアクラフ『ディスコースを分析する：社会研究のためのテキスト分析』日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳、くろしお出版、2012年。
- 17 ノーマン・フェアクラフ『ディスコースを分析する』11-12頁。
- 18 ノーマン・フェアクラフ『ディスコースを分析する』277-280頁。
- 19 本稿で取り上げる事例は、基本的にムスリム・シオニストを自認・自称している人物に限定している。
- 20 イスラエル領内に在住するパレスチナ系市民については、複数の呼称が存在しているが、本稿では基本的に「イスラエル内パレスチナ人」で統一する。
- 21 動画はAish.comというメディアサイトが運営するチャンネルから投稿されている。なおAish.comの母体であるAish Ha Torahは、1974年にラビ・ノア・ワインベルグによりエルサレムで創設されたユダヤ教正統派の教育機関であり、イエシーヴァーの運営等も行っている。Aishdotcom, “Sarah Zoabi: Proud Muslim Zionist,” *YouTube.com*, August 14, 2013 (2021年7月17日アクセス) . https://www.youtube.com/watch?v=yTh4ReWk_jY
- 22 なお本稿では基本的にムスリム・シオニストを自認する当事者が自らその思想について語っているメディアを事例に取り上げている。ムスリム・シオニストに関する既存のメディア記事や報道は、シオニズムに肯定的なイスラエル系メディアによって記録されたものが多いが、本人以外による編集や叙述を通じて何らかの偏向を受ける可能性が高いため、本稿ではこれらなるべく排除している。
- 23 David Grossman, *Sleeping on a Wire: Conversations With Palestinians in Israel*. Haim Watzman Translated. (New York: Farrar Straus & Giroux, 1993); David Grossman, *Death As a Way of Life: Israel Ten Years After Oslo*. Haim Watzman Translated. (New York: Farrar Straus & Giroux, 2003).
- 24 Ben White, *Palestinians in Israel: Segregation, Discrimination and Democracy*. (London: Pluto Press, 2012).
- 25 CDSが注目するディスコースの一側面に、対話性(Dialogicality)の問題がある。フェアクラフによれば、「テキストは、何らかの仕方、異なる『声』のあいだに関係を成立させる。しかし全てのテキストが等しく対話的というわけではない。対話性は、著者の声と他の声のあいだにある対話的關係の程度、つまり、これらの声が表象されたり応答されたり、あるいは逆に排除されたり抑圧されたりする程度の尺度である」とした。またホルクィストによれば、「言葉、ディスコース、言語、あるいは文化においては、相対化されたり脱特権化するとき、つまり、同一のものに対する相容れない定義を自覚するとき、『対話化』が生じる。対話化されていない言語は権威的か絶対的である」。すなわち対話性の問題は、極端な場合、ある特定のイデオロギーのヘゲモニー獲得と、同時に起こるオルタナティブの排除という側面を浮き彫りとする重要な論点である。

- ノーマン・フェアクラフ『ディスコースを分析する』313 頁; Michael Holquist, *Dialogism: Bakhtin and His World*. (London: Routledge, 1981) p. 427.
- 26 CDS における「モダリティ」(Modality)とは、テキストの著者と表象の間に形成される関係で、真理性や必要性の点で著者が示す心的態度のことを指す。フェアクラフの議論では、モダリティは大きく分けて「認識モダリティ」(蓋然性に対するモダリティ)と、「義務モダリティ」(必要性と義務性のモダリティ)がある。分析においては、テキストの著者が真理性の観点から、あるいは義務性や必要性の観点から、心的態度を示しているかどうかに着目する。ノーマン・フェアクラフ『ディスコースを分析する』318 頁。
- 27 CDS では、フェアクラフが提示した「前提」(Assumptions)の 3 類型、すなわちどのような存在の前提、命題の前提、価値の前提がおかれているかに注目する。このとき、存在の前提とは、「存在しているものに関する前提」である。命題の前提は「事実であること、事実でありうること、あるいは事実であろうことに関する前提」である。さらに価値の前提は「優良なもの、あるいは好ましいものに関する前提」である。
- 28 J-TV: Jewish Ideas. Global Relevance, “I’m a Muslim Zionist. Here’s why,” *YouTube.com*, November 5, 2017 (2021 年 7 月 17 日アクセス) . <https://www.youtube.com/watch?v=BC9GIa55sCI>
- 29 近現代のスナナ派世界におけるサラフィー主義は、前近代における四法学派-二神学派体制の伝統の権威を否定し、サラフ(イスラーム黎明期の初期世代のこと)の方法論に立ち返ってクルアーンとスナナを再解釈する必要性を唱えた。中田考「サラフ」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002 年、418 頁。
- 30 《「わが民よ、アッラーがおまえたちに書き定め給うた聖なる地に入れ。踵を返して戻り、そうして損失者として帰ってはならない。」》なお本稿におけるクルアーンの日本語訳はすべて中田監修版による。中田考監修、中田香織&下村佳州紀訳、黎明イスラーム学術・文化振興会責任編集『日亜対訳クルアーン』作品社、2014 年、140 頁。
- 31 《そしてその後、われらはイスラエールの子孫に言った。「この地に住め。そして来世の約束が来た時、われらはおまえたちを混成で纏めて連れ出したのである。」》中田考監修『日亜対訳クルアーン』、321 頁。
- 32 これは動画編集や公開主体の問題であると推測することもできるが、動画の公開からすでに数年が経過し、多くの批判的コメントが寄せられた現在でもなお公開されたままとなっている(公開主体および出演者本人が問題視していない)ことから、彼らの主張は動画の内容をもって過不足なく伝えられていると考えるのが妥当であろう。
- 33 Israel’s Foreign Affairs Min., “GFCA 2013 - Working Group on Antisemitism in the Muslim and Arab World,” *YouTube.com*, June 6, 2013 (2021 年 7 月 17 日アクセス) . <https://www.youtube.com/watch?v=W-oswG0ekGo>
- 34 OfficialCUFI, “CUFI Confronts Anti-Semitism UN,” *YouTube.com*, March 19, 2021 (2021 年 7 月 17 日アクセス) . <https://www.youtube.com/watch?v=3dM7NmpIgoY>
- 35 Christians United for Israel, “CUFI Stands up for Israel at UN Human Rights Council,” *Cufi.org*, March, 20, 2019 (2021 年 7 月 17 日アクセス) . <https://cufi.org/cufi-stands-up-for-israel-at-un-human-rights-council/>
- 36 CBN News, “How a Pakistani Muslim Became a Zionist,” *YouTube.com*, September 18, 2014 (2021 年 7 月 17 日アクセス) . <https://www.youtube.com/watch?v=QNhe0uST-k8>
- 37 Alan M. Dershowitz, *The Case for Israel*. (Turner Publishing Company, 2003); アラン・ダーショウィッツ『ケース・フォー・イスラエル—中東紛争の誤解と真実』滝川義人訳、ミルトス、2010 年。

-
- ³⁸ 代表的なものとして、『フツパー』など。なおフィンケルスタインによる『イスラエル擁護論批判』は、その英題『Beyond Chutzpah』が示す通り、明らかに本書への反論であることが意図されている。Alan M. Dershowitz, *Chutzpah*. Boston: Little Brown & Co, 1991.
- ³⁹ Norman G. Finkelstein, *Beyond Chutzpah: On the Misuse of Anti-Semitism and the Abuse of History*. (Berkeley: University of California Press, 2005); ノーマン・G・フィンケルスタイン『イスラエル擁護論批判—反ユダヤ主義の悪用と歴史の冒涇』立木勝訳、三交社、2007年。
- ⁴⁰ 一般的に「Whataboutism」とは、いわゆる「お前だって論法」(*Tu quoque*)のバリエーションのひとつであり、相手の主張に直接反論・反証することなく、偽善的であると非難したり論点をすり替えることで相手の立場を毀損する論法を指す。
- ⁴¹ テウン・A・ヴァン・デイク「批判的談話研究」ルート・ヴォダック&ミヒャエル・マイヤー編、野呂香代子&神田靖子訳『批判的談話研究とは何か』三元社、2018年、105頁。